

## 大阪市に於ける 帝國鐵道協會總會

鐵道協會の本年の總會は五月十二日大阪市の中央公會堂に於て開催された。交通機關の最も良く發達してゐる大阪市、然も非常時下の重工業總動員體制下の大阪市而して市内外の工事施工中のもの多く、見學と視察の絶好のチャンスである、記者が萬障を排して總會に出席した理由も爰にある。

十日の朝九時半の特急つばめ號で東京を發車して午後五時半に大阪驛に着いた。車中同行の出席者數氏と會ひ、工事談や時局談を交す間に、熱海を過ぎた。丹那トンネル通過の際丈けば記者は常に黙禱を捧げる、それは此大難工事の無名犠牲者の爲にのみではない、實際あの工事中の大崩壞の狀況を視たものには、今日の此の清々しい整頓した複線隧道の中を無心に通過する事は出来ないのである。然し此の感激忽ちに消されて、駿遠の初夏の風光を食堂の窓より眺めつゝ濱名湖を過ぎ、名古屋を過ぎ、京都を過ぎて大阪驛に着く。

大阪驛は今や工事中であるから、コンクリートの高架線下のバラック建假本屋は出入客でゴツメ返してゐる。東京ならば上野驛と東京を合併した程の客の動きである。驛前は又大變な交通混雑である。それは驛前の廣場がまだ出來上らないからである。驛前一帶の舊人家取拂ひ跡の一部に阪神電鐵の大ビル工事の鐵骨が立ちかけてゐる。其隣地が阪急電鐵と爭奪戦中のものである。阪急と阪神と此兩電鐵が激烈なる營業政策の競争は實に目撃しいもので、此等の競争あるが故に大阪の各電鐵は素晴らしい發達を遂げつゝあり、市民は之が爲に便利な交通を利用しつゝある。

大阪驛から直に地下鐵線に乗換へると此處は地上の混雑と打つて變り、整備せる明朗なる交通が非常

なるスピードで行はれてゐる。地上の交通は假令數年後に驛前廣場が整備しても此の地下鐵の明快なるスピードには到底及ばないであらう。其所に地下鐵としての大なる特色がある。斯くして大阪市の中樞線たる北から南へ縦貫せる地下鐵の使命は將來益々有効に發揮せらるゝものと思はれる。地下鐵の建設工事に就ては各種の特色ある工法を實施され、我が工事畫報誌上に度々報道したのであるが、今眼前に此豪華な構築を視て然も工賃の廉なるを知つては、設計及び工事關係者に大なる敬意を拂はねばならない。

十日の夜は南海電鐵の急行に乗つて紀州新和歌浦に濤聲を聞き乍ら一泊し翌十一日は紀三井寺に參詣して觀世音の靈地に國寶建造物を視察し、和歌山市に入りて國寶たる舊城閣を拜觀した。午後は神戸に至りて湊川神社を拜し、工業校に知友を訪ね、大阪に戻り驛前のステーション・ホテルに泊つた。浪速電鐵協會より贈られた乗車證は斯くして東西南北に最も有効に使用される。

十二日は總會日である。天氣晴朗、初夏の陽光は堂島川附近の新緑に映して中島公園を一層美しいものにする。此附近種々な工事の思出をなすつゝ歩むに良き處である。中央公會堂の正面玄関には鐵道協會の係員が出席者の受付事務に忙しい、其所では我工事畫報社が工事サービスの一端として『著名工事視察の手引』の一枚刷を出席者に贈呈配布したが、之は良き參考として非常に好評を博した。

總會は會長井上匡四郎博士の挨拶及び司會の下に開始され、會務報告及議事は簡単に無事終了した。最後に一同起立、支那事變犠牲者の英靈に對し五分間の黙禱を捧げて散會した。

帝國鐵道協會も先年會務の刷新を圖つて以來、會の活動も漸く進み來り、諸種の調査研究獎勵等の事業も實行に移されつゝあり、會勢も増強されつゝあるは慶賀にたへない。今回の出席者は全国各地から八百五十の多きに達し、午後六時から公會堂の大食堂で催された懇親晚餐會には會員以外に大阪府、市、内務、大藏、鐵道等の各方面から來賓として數百名の参加があり、非常な盛會であつた。晚餐會の談話室では記者は先輩連の種々の談を聞くのを樂しみと

してゐるが、特に田邊朝郎博士の座談には三弦あり、琴あり、南畫あり、何れも科學的研究による博士の經驗談で頗る興味あるものである。然も博士が童顏嬰鍊として十木學會等の見學班にも加つてゐらるゝのは感激に耐へない處である。

十三日は市内視察日である。第一班は大阪造幣局と大阪城及び中央卸賣市場を、第二班は大阪港及び日本ゼネラルモーターズ會社工場を、而して午後三時には兩班合して交樂座に於ける浪花電鐵協會主催の歡迎會に列した。

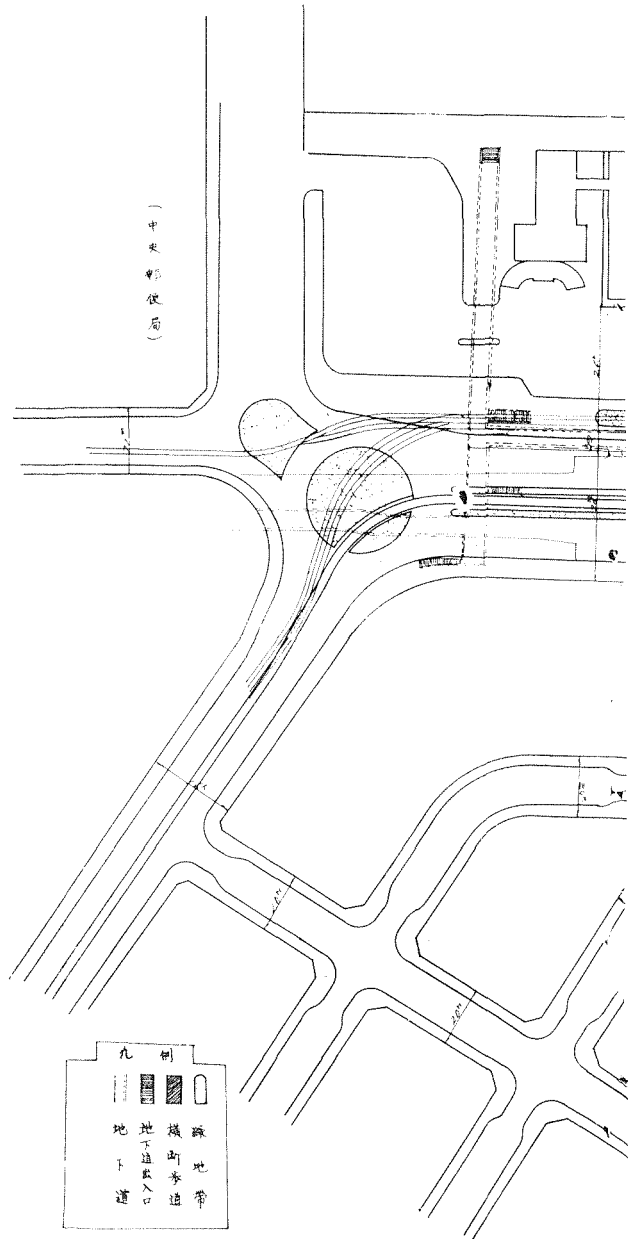
此日好晴、記者は早出して天満天神宮に參詣し、リバーサイドパークとしての櫻宮橋に至り、池邊稻生氏が團長たる第一班は加はり、造幣局の記念物を陳列せる泉布觀を拜觀し、次いで一行と共に造幣局内の工場を參觀した。造幣局は一部の擴張工事が最近竣工した處で、我々は舊工場の一部を案内された工場内では貨幣及び勳章の製作中であつたが、機械設備も整頓し、組織的な工程が進められ、材料及び製品の試験設備等も至れり盡せりに出來てゐるが、尙現在男女従業員八百餘名に對する、精神的、物質的の諸施設が明朗に實行されてゐる點はさすがに官業の代表的なものである。

大阪城に於ては見付の巨大な石積にさすが秀吉公の豪壯なる巨人性を伺ひ、千疊敷の大廣間で晝餐の饗に預りながら大阪城の沿革を聞き、近代的コンクリート造の城内に入りては建築構造の精巧を見、城内に陳列された各種の記念品は終日觀賞しても足りない位のものがある。尙ほ城のコンクリート建築は基礎工事に於て特に注意を拂はれ、周囲の石垣に關係なく中央を掘下げて獨特のコンクリート基礎の上に建築されたものである。

中央卸賣市場は大阪市船運の地たる安治川沿岸の下福島三丁目に在る、陸上よりは鐵道引込線により水陸よりする魚類及び野菜果物等を一日平均千二百噸、金額にして二十四萬六千圓を取引する大阪市民生活の最重要機關の一である。一同事務室構堂にて市場當局の説明を聞き、完備せる三萬九千坪の場内を視察一巡した。

午後三時より交樂座に於ける人形淨瑠璃を觀に行く、會員一同着席するや主催者側を代表して大阪市電氣局長津谷榮三郎氏の觀迎の挨拶あり、次いで井上會長より會員を代表して謝辭を述べられ、やがてし開演となる、藝題はお染久松新版歌祭文と日吉丸

稚櫻小牧山城中の段と外二幕であつた。記者は少年時代に觀たのみで今日再び之を觀てもやつぱり昔の儘の感じである。人形を見る眼と淨瑠璃を聞く耳とが一致しないのであつたが、幕數が進んで來ると義理と人情の細い演出に涙を誘はれる様になつた。之が大阪の古典藝術として今日國寶的に扱はれてゐる

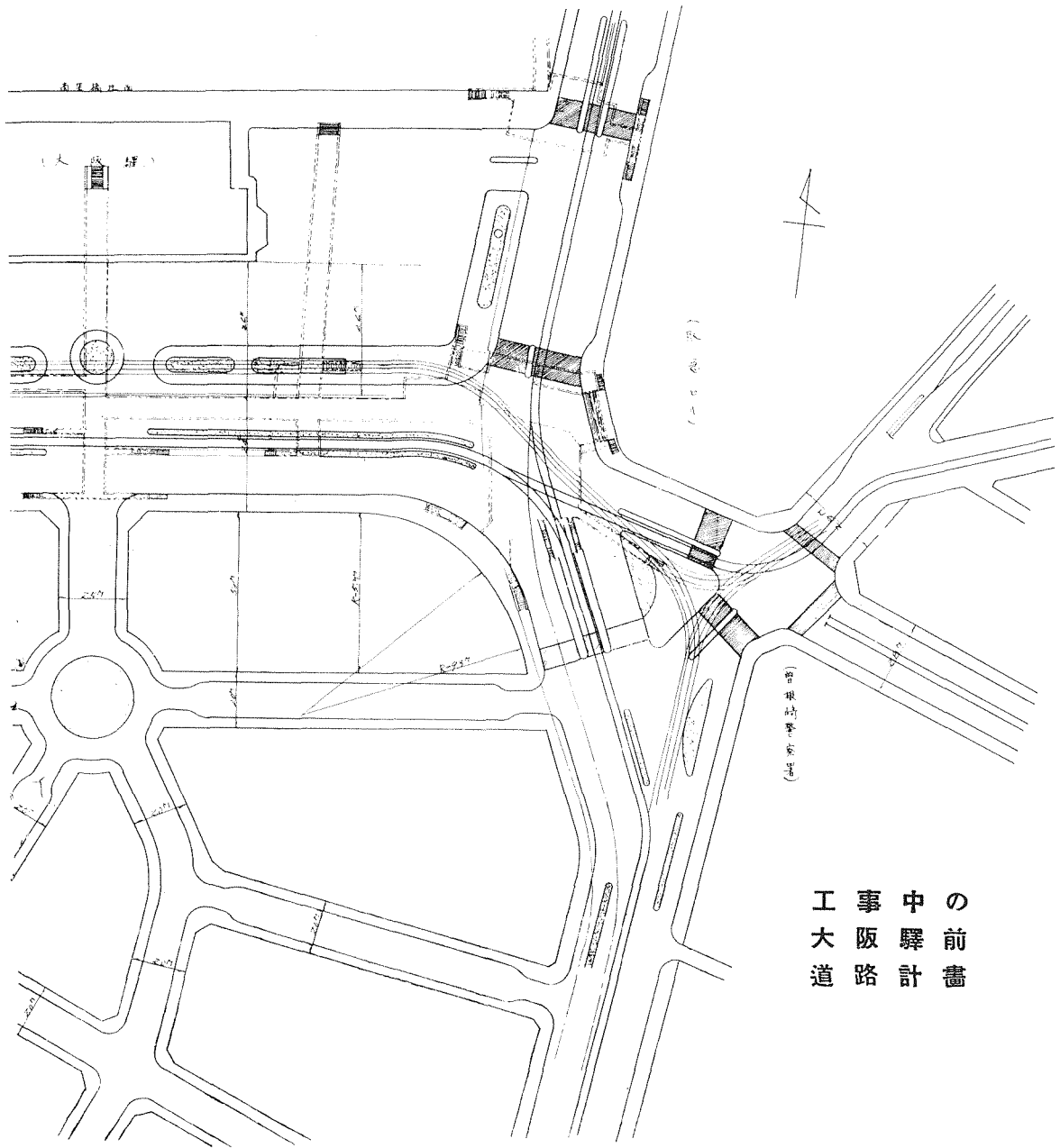


ものであるが、それ丈に又大衆の近づき難いものとなつてゐる。然し一同又晚餐を共にして歓談笑裡に文樂座藝術を充分に觀賞した。

十四日は叡傍御陵と橿原神宮參拜の豫定であつたが、都合により記者は朝の列車で東上する事となり午後六時からの中央公會堂に於ける講演會も聞くを

得なかつた。

尙ほ十二日の午後記者は文樂座の向河岸に在る大阪市電氣科學館内の天象館に至り有名なる天體模型活動(プラネタリウム)の講演を聞いた。之は東京の科學博物館にもまだ設置されてゐない我國唯一のもので、而も教育的なものであつた。(終)



工 事 中 の  
大 阪 驛 前  
道 路 計 畫